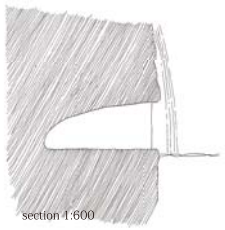
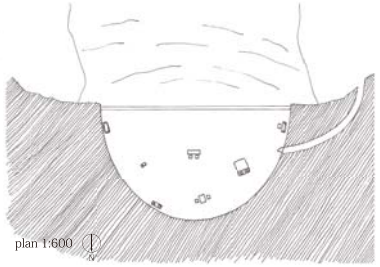
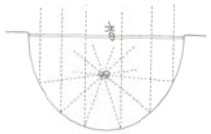
見えないこと/遠近の洞窟/sound planning

滝の裏側。
目に見えることの向こう側に、見えないことの場所がある。
例え、目に見えないことでも、目を細めると見えてくる。
ある夫婦のための落水荘。
見えないことを考えた。
ぼんやりとした光の中、音がつくる落水荘。

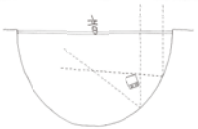
滝があった。
滝の向こう側には、岩盤に覆われた白い洞窟があった。
白い洞窟には、洞窟と同様な白さのいくつかの家具があった。
滝は、洞窟にかかるシルクのカーテンのようだった。
洞窟には、そのカーテンからの柔い光がゆらゆらと落ちていた。
そのゆらゆらの中では、
洞窟も家具も、どれも、ぼんやりとしていた。
調度、目を細めた時のようにしてあった。
見えないことの場所だった。
そんな洞窟の中では、目に見えるものよりも、
耳で聞こえることの方がはっきりとしていた。
聞こえることの場所だった。
洞窟は凹曲面で、その中には様々な音があった。
音は、集まったり、散らばったり、曲面の壁を伝わったりしていた。
そんな風にして、大きな洞窟の中に色々な場所をつくっていた。
その音は、二人に不思議な関係をつくった。
近いのに遠かったり、遠いのに近かったり、そんな関係をつくった。
夫婦は、戸惑った。
でも、すぐにそこが気持ちの良いところだと分かった。
真っ白な洞窟の中の不思議な距離感。
目に見えるものと見えないものがつくる距離感。
見えるものと見えないものがつくる浮遊感。
それが気持ち良かった。
滝の裏側。
目に見えるもの、見えないもの。
例え、目に見えないことでも、目を細めると見えてくる。







二人の机。
滝の音は集まり、轟々と鳴っていて、声も届かない。
視覚的には近くても、二人は遠いところにいるように感じた。



二人のベッド。
滝の音は、散らばり、サァサァと鳴っている。
ささやき声も聞こえる。
視覚的にも、聴覚的にも二人は近くにいた。

ソファとバスタブ。
バスタブでの声、ソファでの声は、
壁伝いに回り込む。
遠くにいる二人は、すぐそばにいるように感じた。

N11133